

中国残留邦人を どう存じますか？

「中国残留邦人」について皆様に知っていただくことと、広報ちくじよう平成24年12月号で、築上町上別府にお住まいの高橋マズ子さんの手記（抜粋）をご紹介します。いただきました。

誌面の都合上、一部しか掲載できていなかったのですが、今月から3回に分けて掲載します（不定期）。

問い合わせ 福祉課 社会福祉係（内線243）

十五歳、戦乱の中国に 一人残されて①

昭和十七年築城小学校を卒業すると同時に私は女子挺身隊として満州（今の中国東北地方）にゆきました。それはお国のために何かのお役に立ちたい一心からでした。昔は今と違って何でもお国のためという教育がされていました。「男が銃を持って戦うだけがお国のためではない。女も従軍看護婦や電話の交換手などお国のために働かなくては」と言う日ごろの先生の教えに決心をして満州に行きました。その時私は十五歳。母は反対しましたが、そして私も親の側にいたかったですけど、お国のために役立つと思うと矢も盾もたまらなく行くことにしました。

船で大連に着き、大平原を突っ走ってやっとハルビン市にたどりつき、二カ月間、電話交換手見習いとして勉強しました。そして、ソ連国境近くの孫呉という所にやられました。そこは日本兵ばかりのような街で、十五歳の私には寂しすぎる街でした。九月の半ばというのに寒くて、雪さえちらつき始めました。こんなところで仕事をして何年後に日本に帰れ

るのかと心細く思いましたがお国のためと自分を励ましていました。

やがてソ連が参戦し激しい空襲があつて容赦なく降つてくる爆弾の下をかくぐつて電話局へ通いましたが、八月十五日に戦に敗戦になりました。日本兵は次々にソ連に連れられて行かれ、私もソ連兵によつて新京に連れていかれました。食べるものもお金もなく、中国人の畑に入つて、腐れかかった野菜を拾つて食べました。しかも同じところに長くいると日本人とわかつて、大勢の中国人から石や棒で襲われます。命からがら逃げ回っていました。着替えの服もなく虱（しらみ）がわき、体ぢゅう痒くてたまりませんでした。お金はなし、食べるものはなし、途方に暮れていたとき、国民党の十二司令部が新京にやってきました。私は身なりも恥ずかしさも忘れ、飛び込んで行きました。余りの哀れな姿に見かねてか、その副官がご飯を食べさせてくれました。服もくれました。数カ月後、その副官と結婚しました。けれども、八路军と国民党との内戦が始まりました。私も国民党の家族として軍隊とともに南満州を転々とし、撫順に着いたとき、女の子を出産しました。撫順で産まれたので、撫生と名付けました。しかし国民党はだんだん負けていくので撫生のお父さんは軍をやめて自分の生まれ故郷に帰ることになりました。その時は言いました。「自分たちが今から帰る故郷は日本兵がものすごく悪いことをしている。自分はその怖さに家を出して国民党軍に入隊したのだ」と。

どんな悪いことをしたのかと聞くと「女子供は殺す。豚や牛馬、鶏は次々殺して食べる。家は焼いてしまう。男は見つけ次第拉致して仕事をさせる。しかも、仕事が終わったら殺してしまつた。だから、日本人と解つたら殺されるかも知れないから台湾人と言いなさい」と。そんなところなら行きたくないと言いましたが、子供がいるし、ここに残つても生活ができないので、一緒に行くことになりました。

（原文のまま掲載）

子育て講演会

「子育てをもっと楽しく！自分らしく子どもを伸ばす子育てコーチング」

子どもが本来持っている力を引き出し、伸ばす子育て方法についてお話しします。また、保護者も楽しんで子育てをし、子どもとともに成長できるような親育ち子育てのコツもご紹介いたします。

日時 2月16日（土）10:00～12:00
場所 築城公民館

講師 富岡郁雄氏

（NPO法人 日本ソーシャルコーチ協会）

主催 築上町青少年育成町民会議

後援 築上町、築上町教育委員会

問い合わせ 〈事務局〉生涯学習課 社会教育係
（支所・内線262）